

三島由紀夫『仮面の告白』という表象をめぐる

—— 1950年前後の男性同性愛表象に関する考察 ——

Reconsidering Yukio Mishima's *Confessions of a Mask* as Representation:
A Study of Representations of Homosexuality from 1949 to 1954

武内佳代

This paper discusses changes in the representations of homosexual motifs in Yukio Mishima's *Confessions of a Mask* (Kamen no Kokuhaku, 1949) by following relevant social phenomena and aspects of male homosexual discourses that circulated during the five-year period between 1949 and 1954. To this day, *Confessions of a Mask* is heralded as an epoch-making homosexual novel that is the first work in modern Japan to depict homosexual love in a realistic way. In 1949, when the work first appeared, however, literary critics were indifferent to this homosexual motif. Meanwhile general readers were curious. The coexistence of conflicting responses has as a backdrop the limited contemporary homosexual discourse and a pervasive heterosexual ideology. Then in 1951, when Mishima's *Forbidden Colors* (Kinjiki, 1951-1953) creates a homosexual social phenomenon, the literary establishment begins to pay attention to the homosexual motif and retroactively reevaluates *Confessions of a Mask* as the origin of Mishima's oeuvre. What I reveal through this paper is that the model for current literary interpretations of *Confessions of a Mask* emerges from a reproduced discourse that emerged in the 1950s after *Forbidden Colors* appeared in print.

Key words : homosexuality post World War II Yukio Mishima's *Confessions of a Mask*

本論文は、終戦後の1949年から1954年にかけての約五年間における男性同性愛言説の様相、および、それと連動する社会現象を追いつつながら、この期間における三島由紀夫『仮面の告白』(1949年)の同性愛モチーフの表象の変容を論じるものである。本作は、現在にいたるまで、近代日本で初めて本格的に同性愛を描いたエポックメイキングな同性愛小説として表象している。だが刊行当初、文芸評論家たちはその同性愛モチーフに一概に関心せず、一方で、一般読者のなかには好奇心を抱くものも少なくなかった。この相反する反応の共存には、当時の同性愛言説の少なさや異性愛イデオロギーの浸透が背景としてある。そして1951年、三島の第二の同性愛小説『禁色』が同性愛の社会現象化をひき起こすと、文壇もまた同性愛モチーフに関心を寄せるようになり、三島文学の源泉として『仮面の告白』を遡及的に再評価しはじめる。以上のことから、現在の『仮面の告白』という文学表象が、50年代以降になって再生産されていたものであることを明らかにした。

キーワード： 同性愛 第二次世界大戦後 三島由紀夫『仮面の告白』

はじめに——戦略としての同性愛モチーフ

三島由紀夫の出世作『仮面の告白』(河出書房、1949年7月)¹は、1925(大正14)年から1948(昭和23)年という23年間の「私」の男性同性愛者としてのセクシュアル・アイデンティティをめぐる内的葛藤が手記的に綴られた長篇小説である。戦後文壇で居場所を失っていた²頃にあたる48年8月28日に河出書房編集者坂本一亀から声がかかった初の書き下ろしであり、また、この執筆のために同年9月には大蔵省を退職したことを考えれば、本作で職業作家デビューをねらった当時の三島の意気込みは計り知れない。そこで三島がとったモチーフ戦略こそ、同性愛³を小説化することであった。このモチーフ選択がいかに読者の関心を誘う戦略として意識されていたかは、近年公表された本作の序文原稿の書き込みから窺い知ることができる。「仮面の告白」というタイトルが付されたその序文表紙には、ドイツ語で das sonderbare Geschlechtsleben eines Mannes (男の異常な性生活)、das ungewöhnliche (稀な)、überspannte (極端な)、seltsame (奇妙な)、sonderbare (風変りな)、exzentrische (偏奇な) といった執拗な書き込みが見られる⁴。この書き込みは、作家の同性愛モチーフの選択意図を明確に語っている。すなわち三島は、「この国にも、また外国にも、Sexual inversion (武内注・性倒錯)の赤

裸々な告白的記述は類の少ないもの⁵という確信のもと、読み手の好奇心を誘う戦略として、「異常な性」としての同性愛をモチーフとして選択したのである⁶。

だが、2006年にたって、本作が必ずしも同性愛に焦点化された小説ではないことが盛んに論じられるようになってきた⁷。なるほど主人公「私」による告白の半分以上は園子との異性愛的な恋愛問題に割かれており、かつ、あらゆる男性に惹かれこそすれ、彼らとは実際的な恋愛関係を結ぶことがないままに終わる。その意味では確かに同性愛小説としては不十分の感がある。だが、たとえ現在はそう見えても、本作がさきのようなモチーフ戦略を大前提として描かれたものである限り、その戦略を支えるような性規範や性配置が終戦後まもない当時の日本社会に編成されていた／されつつあったと考えるほうが自然である。

そこで本稿は、改めて1949年から54年ごろにかけての日本社会の同性愛言説の変遷をたどりながら、その変遷にリンクして本作の同性愛モチーフが当時どのように捉えられていったかを再検討する。同性愛モチーフに対する当時の文壇および一般読者における意識の温度差や変容などを改めて析出することで、『仮面の告白』という文学表象自体の変容について考察を加えるつもりである。本稿はこうした作業を通して、『仮面の告白』という文学表象を戦後という

時代性にそったものとして再文脈化するとともに、これまであまり検討されていない1950年前後の日本の同性愛に関わるセクシュアリティ編成の様相の一端を示したいと考える。

1. 文壇による〈異常な性〉の不可視化と〈牡の文学〉という位置づけ

『仮面の告白』は、刊行当初こそ注目されなかったものの、のちに花田清輝評⁸の追い風で文壇からのあつい支持を獲得し⁹、三島は本作で晴れて(戦後作家)として華々しいデビューを飾ったことで知られる。だが当時の文壇は、さきに触れた三島のモチーフ戦略とは裏腹に、その同性愛モチーフに「異常な性」を読み取ることはほとんどなかった。この現象を小島千加子のように「評論家の自己防衛」という「ホモフォビア」によって「ホモ小説じゃないということにされ」¹⁰たとみなすこともできるが、当時の『仮面の告白』評を丹念にたどると、論じれば我が身に嫌疑がかけられる「異常な性」ゆえに男性評論家たちが同性愛モチーフへの言及を避けたわけではなく、むしろ彼らがそれを「異常な性」として認知しえなかった様子を窺い知ることができる。以下、同性愛モチーフへの言及に焦点化して改めて同時代評をたどってみたい。

本作について早くは荒正人が、「異常心理でもなんでもなくむしろ生理的な現象」にすぎない「倒錯心理」が「二十歳すぎまで保存されていたというだけ」の「若い季節をつよくかんじさせる」小説だと評している¹¹。また同新聞の無署名の書評も「同性愛とサディズムの世界」が「健康的にとどまると批判したうえで、「みず／＼しい素直な筆致」を評価¹²し、荒と同様に本作で描かれる同性愛指向をあえて「異常な性」と強調することなく、それよりもむしろ若い新進作家の登場に力点を置いている。さらに当初の売れ行き不振を打開するために書かれた神西清評は、聖セバスチアンの殉教画が引き起こす「私」最初のejaculation(武内注・射精)の挿話に、「ひろく世界文学を通じても珍らしい男性文学(あるひは一そう端的に牡の文学といつてもいい)の絶品」¹³という賛辞を贈ったが、これも同性愛を健全さとリンクさせた荒たちの認識とさほど遠くない。また、北原武夫・中野好夫・林房雄による創作合評では、唯一北原が「ソドムとか」に「得意」なだけで「官能的なものは何もない」と同性愛モチーフに顔をしかめてみせるものの、すぐに中野がそれを否定しつつ、「少年時代の性の目ざめを書いた部分などは圧巻」と神西同様の見解を示し、林もそれに同意する。そして林は、三島が「とにかく鬼才」で、「ちよほど川端さんとか、横光さん、芥川さん、谷崎潤一郎、みんな角帽で文壇に出た」ころのように「今また三島君を先頭に若い作家が出はじめた」と、若き鬼才の登場への期待をもって合評をまとめる¹⁴。一方、この合評を「若い世代のポーズだけをみて、無理に安心したがつている」と揶揄する花田清輝評は、「性倒錯という内向型の仮面」をかぶって「自己批判的に「おのれの肉体を模索」した本作を「日本の二十世紀」文学の夜明けと絶賛する¹⁵。だが言うまでもなく、この花田評にしても「性倒錯」を単なる「肉体」の問題に一般化して「戦後に出現した」世代の新しさを言祝ぐ点では、さきの書評や合評とそう懸隔はない¹⁶。

このように、三島の意図に反して同時代評は、同性愛を「異常な性」ではなく男性の成長過程における健全なセクシュアリティとみなすことによって、それを戦後の新進作家による〈牡の文学〉と措定した。いわば同時代の文壇は、本作の「異常な性」という表象を不可視化し、その〈告白〉=カミングアウトの機能を無効化したのである。

こうした文壇の反応について日本のゲイ研究の第一人者伏見憲明は、当時の「男色=趣味嗜好という理解と、近代的西洋的な同性愛という変態の概念」とのせめぎ合いをその背景に透視しているが¹⁷、こうした二つの同性愛概念のせめぎ合いについては古川誠による次のような分析がある。古川によれば、日本の近代以降の同性愛概念は、武士や男娼に関わる美的価値観をはらんだ前近代的な「男色コード」と、1920年代に流行した西欧の性欲学・性科学がもたらした〈病〉としての「変態性欲コード」とのおよそ二つに大別でき、1920年代から80年代までの日本では「変態性欲コードを中心としながら、その対立思想として男色コードを残存」させた同性愛イメージが支配的だったとされる¹⁸。たしかに同性愛モチーフに対する三島の認識と文壇のそれとのずれは、そうした二つの同性愛コードの混在に由来しているとみて間違いはない。だが古川の分析と異なる点として、同性愛モチーフを健全な〈牡〉の表現とみなした49年ごろの文壇においては、〈病〉としての変態性欲コードではなく、むしろ男色コード(武士モデル)が中心化されていたみることができ。一方で、同性愛を「異常な性」として描き出そうとした三島は変態性欲コードを中心に据えていたといっている。こうした認識のずれは、49年ごろの日本社会が抱いていた同性愛イメージにおいて、二つのコードの混在ばかりでなく、それらコードがある程度拮抗する状況にあったことを物語っている。そして当時の日本社会がこのように同性愛モチーフに正常／異常という相反した表象を許容した背景には、同性愛言説自体の少なさという問題が関わっていると考える。次章では当時の同性愛言説の状況を確認してみたい。

2. 同時代的な同性愛言説の状況と一般読者の眼差し

さて、刊行の数年後には「多数の人の口の端に上った作品」¹⁹となっていた『仮面の告白』は、現在にいたるまでエポックメイキングな同性愛小説として認識されている。このことを伏見憲明は、「戦後の日本のゲイシーンにとつての『ファーストインパクト』、といえ、三島由紀夫の登場だった」²⁰と言い換えているが、実際、文学研究の領域においても日本の「同性愛文学の近代開始」²¹と定位されることもあるほど、近代日本の同性愛小説の〈先駆〉としての表象をおっている。

だが、さきにみたように本作刊行当初の文壇は、本作が同性愛小説であることの特異性にはとくに関心を払っていなかった。あるいはそれに言及されるにしても、同性愛モチーフという共通性だけに注目して森鷗外『キタ・セクスアリス』(『スバル』1909年7月)の後続・変形という程度にとどまっていた²²。すなわち、当時は現在のようなエポックメイキングな同性愛小説という認識はされていなかったのだ。本作に対する当時の認識と現在のそれとの大きな隔たりは、なぜ、どのように、起こったのだろうか。本稿は最終的にそのことを明らかにしてみたい。

ところで、前章では本作の同時代評を取り上げたが、それらは同じく同性愛をモチーフとした『禁色』(第一部連載「群像」1951年1月～10月、第二部連載「文学界」1952年8月～1953年8月)の連載開始前の書評だけにしぼった。なぜなら、後述するように『禁色』連載以降の『仮面の告白』評においては、本作の同性愛モチーフへの言及が増えるという顕著な変化がみられるからである。こうした変化は、本作刊行の49年ごろと『禁色』連載の51～53年ごろとで、同性愛の社会的な認知度に少なからず変化があったことに関連していると考えられる。

ではひとまず、さきの同時代評が書かれた49年までにしぼって、当時の同性愛言説の状況を概観してみる。

伏見作成の「ゲイ年表」²³によれば、「30年代後半以降は、戦時体制の進捗により言論統制が進み、同性愛を含めたセクシュアリティに関する言説が少なくなる」²⁴のにあわせて、およそ1930年で戦前期の同性愛言説は途切れてしまう。その後、十五年もの空白期を経て終戦後はじめて同性愛が広くメディアに取り上げられるのは1948年11月23日の「上野の森警視総監暴行事件」である。この事件は、終戦直後から多く夜の上野の森に出没しはじめた女装の男娼たちが、視察の警視総監一行に暴行を加えたというもので、「毎日新聞」など当時の大手新聞メディアを賑わせたことで知られる²⁵。そうした傍らで、同年には日本最初のゲイバー²⁶「ブラウンウィック」が銀座一角に静かに開店し、女性ジェンダーを身に纏った男娼たちとは異なり、主に男性ジェンダーをもった男性同性愛者同士が小さな交流の場をもちはじめている²⁷。そして、その翌年7月、三島が『仮面の告白』を刊行する。

このように同性愛に関する情報が極めて少ないなかで²⁸、イギリスの医師ハヴェロック・エリス²⁹やドイツの医師マグヌス・ヒルシュフェルトの著作といった戦前に流行した性科学言説を積極的に摂取することで、三島は1948年11月から、「出来る限り科学的正確さを期し」³⁰本作の執筆を開始する。この三島が変態性欲コードを中心化して本作の同性愛モチーフを描く過程においては、戦後の性科学言説を牽引した心理学者望月衛の助言に多く拠っているとされるが³¹、興味深いことに本作刊行から四ヶ月後、望月は三島との繋がりを隠蔽するような一本の論文を雑誌「思索」に発表している³²。

この論文で望月は、同性愛者の「ある知識階級の青年」が紹介してくれた『仮面の告白』に、自著『性と生活』で詳論した「仮性同性性愛」³³の「生き生きとした表現」を発見したことを述べ、「仮性同性性愛」と本作の同性愛の造型との類似性を細かく分析検討してゆく。だが、本作執筆時から後々まで続いた、三島と望月との間の再三にわたる同性愛に関するやりとりの際、「仮性同性性愛」に（あるいは『仮面の告白』にも）話題が及ばなかったとは考えづらい³⁴。とすれば、この奇怪な論文は「仮性同性性愛」モデルに依拠した可能性の高い本作の同性愛の造型を再帰的かつ同語反復的に分析しなおしているにすぎないとみることできる。単に、当初売れ行き不振だった本作を広く宣伝するために書かれた論文だった可能性もあるが、執筆理由はともかく、同性愛言説が稀少な当時のメディア状況下、この著名な心理学者望月の論文が果たした役割は決して少なく見積もるべきではないだろう³⁵。比較的知識階層向けの雑誌「思索」を通した、望月の同性愛モデルと本作のその造型との再帰的かつ補完的な表象の往還は、いまだそのイメージが熟さぬメディア状況のもとで、「仮性同性性愛」=「変態」³⁶=〈病としての異常な性〉としての同性愛イメージ（変態性欲コード）を一部の知識階層の読者に発動させ、彼ら読み手の好奇（あるいは同性愛当事者なら苦悩）を誘い出したと推察することもできるからである。

以上のように、1949年前後は、本作を取り巻く同性愛言説は極めて少なかった。だが、性の解放ムードによって性が大衆の最大の関心事の一つであった当時の風潮にあって、文壇の反応はどうあれ、知識階層を含めた一般の「多数の読者」が稀少な「性的倒錯」への「好奇心」を本作に向けたとみる猪瀬直樹の推察³⁷はおそらく正しい。もっとも、性解放の気運におけるこうした読者の同性愛モチーフへの関心は、同性愛言説の稀少さばかりではなく、むしろ当時の異性愛主義的な性言説の隆盛のほうにこそ多く起因していたのではないか。つまり、一般読者の好奇の眼差しは、同性愛言説に乏しい

終戦直後、異性愛主義的な性言説の劇的な中心化によって、同性愛が異色な性の表象として周縁化されたことと関連していると考えられる。

3. ロマンチック・ラブ・イデオロギーの台頭と同性愛の周縁化

終戦直後に到来した性解放の象徴といえば、1946年創刊の「赤と黒」(9月)、「猟奇」(10月)にはじまる風俗系カストリ雑誌の流行や47年の額縁ショーにはじまるストリップショーの流行、あるいは、47年を全盛とするパンパン・ガールなど街娼の出現やそれを小説化した田村泰次郎『肉体の門』(風雪社、1947年)のベストセラーといった、いずれも異性愛主義的な文化・社会現象がたびたび挙げられるが³⁸、なかでも「戦後の性解放をもっとも体現している」³⁹とされるのが、ヴァン・デ・ヴェルデ『完全なる結婚』(原著1926年)の翻訳出版である。46年10月に柴豪雄・酒井敬一による完訳が大洋社から、同年11月に神谷茂数・原一平による抄訳がふもと社から出版されたが、抄訳と低価格とで大衆の手がのびやすかったふもと社刊のほうがよく売れ、はやくも同年には発行部数30万部(50万部以上とも)に達し、二年連続のベストセラーとなる⁴⁰。性交体位・前戯・後戯などを体系的に記したオランダ人医師の手になるこの性科学書は「時を得たエロ本とハウツーものの合金」⁴¹として異常なほど持てはやされ、「戦後の性知識はほとんど、ヴァン・デ・ヴェルデによって占められた観さえ呈した」⁴²。

この戦後日本の性規範に多大な影響を与えた『完全なる結婚』⁴³は、夫が「妻の誘惑者」となって「永遠に続く一夫一婦的な愛の結合こそ、性本能の進化」であり「完全なる結婚」である⁴⁴ことを謳ったもので、いわゆる男性優位の「性=愛=結婚」が三位一体の近代ロマンチック・ラブ・イデオロギー⁴⁵を強烈に打ち出していた。その意味で同書は、「エロ本」やセックスの「ハウツーもの」といった意味合いばかりでなく、折からの成人男子の復員や性の解放ムードといった社会的条件や、加えて結婚の自由(第24条)を基本的人権とした46年11月3日の日本国憲法公布(翌年5月3日施行)およびそれに伴う夫婦単位を〈家族〉と規定しなおした47年の戸籍法改正⁴⁶といった法的条件がそろうなかで、戦後の恋愛結婚指向や夫婦生活のエロス化を促進したロマンチック・ラブ・イデオロギーの役割をも担ったことは想像に難くない⁴⁷。

この『完全なる結婚』ブームの連鎖反応であろう、48年から50年ごろの第二次カストリ雑誌ブームのなかで、夫婦の性生活に関する医学記事を載せた49年6月創刊の「夫婦生活」は、毎号数万部ずつ部数をのばし、翌50年1月には35万部を記録する(当時の『中央公論』は8万部)⁴⁸。また、これに便乗して数多くの〈夫婦生活〉系の亜流誌が発行され、飛ぶように売れた⁴⁹。つまり、55年ごろには週刊誌に吸収されるこの種の〈夫婦生活〉系雑誌は、ちょうど『仮面の告白』刊行時期の49年ごろ、『完全なる結婚』を引き継ぐかたちで性・愛・結婚が三位一体となったロマンチック・ラブ・イデオロギーを再生産し強化していったのである。このように終戦直後からの性解放の気運において、ロマンチック・ラブ・イデオロギーを中心として、性に重点がおかれた異性愛イデオロギーが、書籍・雑誌メディアやその他の文化・風俗を通して急速に日本社会に浸潤していった。

他方、『完全なる結婚』と同様に戦後の性解放を体現しているとされるのが50年に翻訳出版されたアルフレッド・キンゼイ『キンゼイ報告』男性版(原著1948年)である⁵⁰。本書は、38年から47年にかけての合衆国男性の性歴を広く調査し、完全な異性愛的行動を

「0」、完全な同性愛的行動を「6」とする「キンゼイ等級」で分類することによって、善／悪、正常／異常といった社会的・道徳的意味を捨象した男性のセクシュアリティの実態を示そうとしたものであった。そのため当時の日本において、ときに「同性愛に対する規制緩和を後押し」⁵¹する役割を果たしたが、大半の場合、この『キンゼイ報告』はセンセーショナルな性の実態報告と受けとめられた。その意味で、この『キンゼイ報告』は同性愛を「異常な性」とする異性愛主義に対する対抗言語たりえなかったとよく、基本的に「四〇年代後半から五〇年代前半」は、「婚姻内性交を極大の正当性とエロス性を有した性行動として中心に配し」、同性愛などの「それ以外の性行動を周辺に置いた」⁵²時代だったといっている。

以上のような状況にあった『仮面の告白』刊行当時、異性愛から逸脱するものとしての同性愛は、戦時中に比べてある程度許容されながらも、治療および猟奇の対象に貶められたり、無いものとして不可視化されたり、あるいは異性愛の前戯的な性として後景化されたりといったかたちで、周縁化されざるをえない運命にあったと考えられる。ならば、本作の同性愛モチーフに対する三島の認識、あるいは文壇の無関心に近い反応や一般読者の好奇心は、いずれも戦後の異性愛イデオロギーの浸透に連動した時代的現象とも言い換えることもできるにちがいない。

4. 『禁色』以後の同性愛言説と表象の再生産

さて、1951年の『禁色』連載期に至ると、文壇は改めて『仮面の告白』の同性愛モチーフに関心を注ぎはじめる。たとえば野間宏は、三島が『仮面の告白』で「男性に対する愛と女性に対する特別な反応」を描いたお蔭で、それまで「理解しがた」かった三島文学に「いまではわかりにくいところはない」⁵³と論じ、一方、臼井吉見と中村光夫の対談では、臼井が本作のおかげで三島の「源がわかった、本音が知れたという安心感」を得、「特に『禁色』の意味というか、位置というものがハッキリ」と野間と同様のことを述べ、中村もこれに同意している⁵⁴。

『禁色』連載以降にあらわれた、こうした『仮面の告白』の同性愛モチーフに三島文学の源を発掘しようとする見解は、臼井自身が述べるのとは逆に、『禁色』で描かれた同性愛モチーフへの強い関心から遡及的に本作を位置づけなおしたものだといっている。これ以降、それまで関心事とされなかった本作の同性愛モチーフは、「三島文学の源泉」として文壇によって再定位され重要視されてゆく。それを示すかのように、さきの対談で中村は、「男色とはどんなものかほとんど、誰も知らない」ために、「三島君の思うままに、こつちは引き廻され」るが、「三島君の男色は、さつき悪口の意味で、芸術的と言つたけれども、むしろ精神的な男色といった方がいい」など、対談の随所で同性愛モチーフに言及せずにはいられないそぶりを見せる⁵⁵。また過去、本作を「牡の文学」とした神西清も52年の評論では、三島の「得意の男色論」は「門外漢のぼく」には「話がわからぬ」と認めながらも、「牡の文学にとつて避け得られぬ宿業」としての「ナルシシズム」、「実に健康で、真に男性的なみづみづしい」などと、同性愛モチーフに対して積極的に「自己流の解釈」を施し、三島が『禁色』で本格的に「男色」小説の創造に乗りだしたことを讃えている⁵⁶。

確かに、こうした論調の変化は、本作のプラトニックにすぎなかった同性愛が、『禁色』にいたってリアルな肉肉関係として描かれたために、そこではじめて文壇がそのセクシュアリティの異性に衝撃をうけ、にわかに『仮面の告白』の同性愛モチーフに関心を寄せはじめたものとして解釈できるだろう。だが、そうした文壇の関心

の高まりは、当時の『禁色』とリンクした同性愛言説自体の増加と、それに寄せる大衆（一般読者）の関心の高まりといった社会動向との連動とも解せるのではあるまいか。

実際、50年代に入ると、本作執筆のころの48年前後にはまだ極めて乏しかった同性愛言説が徐々に増えはじめ、その黎明期を迎える。たとえば、50年に「人間探究」、51年に「あまとりあ」が創刊される⁵⁷と、これらの風俗雑誌はたびたび同性愛を特集した⁵⁸。とくに高橋鐵編集の「人間探究」は早くから同性愛特集を組み、男色研究者岩田準一の連載、戦後初の同性愛サークル「アドニス会」の会員募集広告の掲載、ゲイバーなどの「男色社交場」の紹介をおこなったとされる⁵⁹。また、当時在野の性心理学者として著名だった高橋は、この種の風俗雑誌への多数の寄稿や『精神分析学から見た変態性慾論』（千代田社、1950年）刊行などを通して性科学的な観点による同性愛言説を積極的に世に発信し、さきの望月衛とともに戦後日本に変態性欲コードを定着させていった人物の一人として知られる。とはいえ50年の段階では、当事者同士の交流の場自体も稀少であったうえに、同性愛者たちの交流の場や彼らの生活実態などを風俗誌以外の新聞雑誌メディアが取り上げることは極めて少なかった⁶⁰ため、「同性愛者は精神病で、異常で変態だと誰もが思い、同性愛者自身もそう思って、悩み苦しんでいた」⁶¹。そうした同性愛言説の黎明期にあって、51年1月から文芸誌「群像」での『禁色』連載がはじまる。

三島の長篇小説『禁色』は、ある老作家が同性愛者である絶世の美青年南悠一を利用して女たちに復讐を試みる物語だが、同じ同性愛をモチーフとしながらも、悠一が同性愛者の溜まり場に入りし、積極的に肉肉関係を結んでいく点で、『仮面の告白』の同性愛表象とは大きく異なる。『禁色』全二十三章のうち、はやくも第四章（「群像」1951年3月）では、終戦直後から同性愛者たちの出会いの場であった日比谷公園が「H公園」として描かれ⁶²、つづく第七章（「群像」1951年4月）では、ゲイバーの先駆「ブランスウィック」が「ルドン」と店名を変えて描かれる⁶³。煩雑さを避けるため引用は控えるが、それら悠一の道行きにある同性愛者の溜まり場は、実地にもとづいた位置関係や様子などが詳細かつ克明に描かれているため、当時「孤立していたゲイがバーやハッテン場などに行き着くことができたという現実的な効果」をもたらしたとされ、さきのようなメディア状況下、『禁色』が彼らの「ネットワークングにおいて果たした役割は大き」かった⁶⁴。その後『禁色』は、第十八章までの第一部が51年11月に書籍刊行され、続けて第二部が52年8月から53年8月まで雑誌連載される。こうした連載・刊行の間、作中に描かれた悠一の同性愛遍歴と共振するかたちで、同性愛記事を増やしはじめた新聞・雑誌メディアを通じて同性愛者のネットワーク化やコミュニティ化が急速に促進されていった。

たとえば、51年には新たに新宿三丁目にゲイバーの名店「イブセン」が開店するが、他方、東京都発行の地方新聞「内外タイムス」が同年10月23日に上野の森の「男娼の生態」の記事を、翌年2月9日に同性愛者の出会いの場としての日比谷公園の記事を大きく取り上げている。また、52年9月には同性愛サークル「アドニス会」が「今日のゲイ雑誌の雛形」となる会員誌「ADONIS」を創刊し⁶⁵、さらに翌年には再び「内外タイムス」が「イブセン」の紹介記事を掲載する⁶⁶。そして、こうした雑誌新聞メディアや風俗を通じた同性愛者のネットワーク化・コミュニティ化の社会動向を象徴するように、53年の春ごろに「風俗草紙」、同年8月に「風俗科学」という、同性愛者専用の投稿欄を設け、毎号のように同性愛問題を真摯に取り上げた二雑誌が創刊される⁶⁷。

それら創刊当初の同性愛記事を確認してみる⁶⁸と、決して猟奇的

ではないものの、変態性欲コードを底流させつつ様々な偏差をもった同性愛論が混在していることがわかる⁶⁹。また、そのほとんどに共通しているのは、戦後の同性愛の(社会現象)化を強調していることである。たとえば53年の「風俗草紙」には、「戦後の男娼の出現」を「大正年間の流行以後最大の現象」とする記事⁷⁰や、戦後「注目を集めた」同性愛が「日を遂うとともに、一部の人々の関心を増していく」とする記事⁷¹がみられ、同年の「風俗科学」創刊号においても特集「男色時代」で「わが国の終戦後の恐るべき男色の流行」を論じた記事⁷²がみられる。

さて、以上のような51年から53年にかけての同性愛言説の増加と、同性愛者たちのネットワーク化・コミュニティ化の動き、および、同性愛を(社会現象)とみる共通認識の現出から推察できるのは、51年の『禁色』というファースト・インパクトを受けて、同性愛当事者たちの動きと、彼らを主な読み手とする新聞雑誌メディアの言説の動向とが連動し合いながら、同性愛が急速に(社会現象)とみなされるようになったのではないかと、ということだ。53年の「風俗草紙」の読者投稿欄には、「『禁色』の悠一が僕の心の愛人」と同性愛の煩惱を打ち明ける投書⁷³や、「『仮面の告白』『禁色』などには、到底及びもつかずとも自身の「体験」から「男色に関する作品」を描きたいとする投書⁷⁴など、同性愛当事者による『禁色』への言及を見いだせる⁷⁵が、それらは当時の『禁色』のインパクトの大きさを示す証左といえよう。また、54年の「風俗科学」に掲載された、医学博士比企雄三と作家扇屋亞夫による同性愛に関する対談には次のようにある⁷⁶。

比企 「三島由紀夫さんの小説に出て来る人物で何て云つたかな——。」

扇屋 「悠ちやんですか。」

比企 「そう、その悠ちやんね。非常に魅力のある美青年なんだが、ある場合には、女性的な役割もしている——。」

扇屋 「現代「そどもあ」の特徴と云つてもいいですね。」

(中略)

比企 「容貌と云うものはどうでしょう。三島由紀夫さんの小説にも、容貌は大きな役割をしているようですね。」

扇屋 「最近はやはり顔でしょうね。」 (下線部・武内)

下線部から明らかなように、『禁色』の同性愛表象は、当時の同性愛者の特徴が予め示されたものとみなされている。すなわち『禁色』のファースト・インパクトは、同性愛者の交流の場を広く紹介するにとどまらず、その同性愛表象が同時代の同性愛言説・同性愛イメージの参照枠となったことも含意していた。また、さきにみた同性愛者による投書は、同性愛言説の黎明期にその参照枠ともなった『禁色』の同性愛表象が、彼らの(生)＝主体性にまで深く食い込んでいたこともうかがわせる。

こうして50年代にいたって、『禁色』の登場によって急速に言説の共有が可能になった同性愛当事者およびその論者たちは、以後『禁色』を参照枠としながら、テキスト／身体を通して同性愛表象を再生産していくことになったと考えられる。そして、まさにこのように『禁色』が導引した同性愛の(社会現象)化のなかで再生産されたものこそ、さきの『禁色』連載以後の『仮面の告白』評だったのである。

ひるがえって、さきの同性愛者たちの投書が、同性愛の恋の懊悩の告白と自らの同性愛体験を小説化する意気込みという、あたかも『仮面の告白』の語り手「私」をなぞったかのような欲望の発露であったことを思い返してみたい。これは、当時『禁色』の登場によって、環境的・心情的にある程度雑誌メディア上で主体性を紡げるようになっていた同性愛当事者たちにとって、『禁色』ばかりでなく『仮面の

告白』もまた、彼らの(生)を先取り、彼らの先鞭的な代弁者、参照枠として機能していたことをあらわしているといえないだろうか。もっとも同性愛が(社会現象)とみなされた当時、彼ら当事者でなくとも一般読者もまた、『禁色』に先行して既刊されていた本作を、『禁色』以前の初発の同性愛物語として改めて注目しはじめたことは想像に難くない。当時のこうした読者の再認識・再評価は、当然文壇の認識・評価とも互恵的に連動し、共有されていたと考えられる。こうして同性愛言説の黎明期という時代と共振した51年の『禁色』のファースト・インパクトによって、『仮面の告白』は文壇と一般読者の間で遡及的に同性愛小説の原点とみなされるようになり、以後、そうした表象が再生産されてゆくことになったにちがいない。

さきの比企・扇屋対談と同時期すなわち1954年、中野武彦は、同性愛モチーフの「異様な色合い」こそが本作の「官能的陶醉感」の「極めて重要な要素」であり、「三島の作家としての資質」が「縦横に腕を揮へるのは、その一種異様な色合を帯びさせる異常な男色の世界に於いて」だとする評論を発表している⁷⁷。この中野の評論は、同性愛のモチーフに注目し、そこにこそ三島文学の源泉を見出している点では、さきの『禁色』連載当時の野間や白井らの論旨と大差ない。だが、同性愛を「異常」と断じつつ、その「官能的」な「異様な色合い」、すなわち本作のホモエロティックな表象自体を積極的に評価している点では、それまでの書評とは一線を画しているといえる。〈同性愛小説の原点〉とはいえ、あくまでプラトニックな同性愛や異性愛の煩惱が描かれているにすぎない『仮面の告白』が、ここにきて極めてホモエロティックな小説として、文壇において表象しはじめたことを中野の評論は端的に物語っているといえよう。

こうして『禁色』という表象から再帰的にホモエロティックな同性愛小説の表象を獲得した『仮面の告白』は、1950年代前半以降、文壇および一般読者のなかで戦後の同性愛小説の原点として正典化されてゆくわけだが、さきにみた当時の文壇の論調からもわかるように、それは三島の出世作であり私小説的作品⁷⁸でもあったがゆえに〈三島文学の源泉〉としての意味合いを濃くすることになった。この先、三島は新たな作品を世に放つたびに、着実に戦後の(文豪)として定位されてゆくわけだが、そうした三島の(文豪)イメージもまた、上記のような本作の正典化を助長したことは明白である。

今日、三島由紀夫の同性愛小説に言及して、『仮面の告白』よりもまず先に『禁色』の名を挙げる者はおそらくいないだろう。だが、ひとたび1950年前後に目を向けるとき、それが時代的なコンテクストを反映した選択であることに私たちは気づかされるにちがいない。

おわりに——「私」の物語に向かって

ここまで本稿は、1949年から54年にかけての約五年間における同性愛言説の変遷、およびそれと連動した社会現象を追いながら、『仮面の告白』の表象の変容について検討してきた。そこで、49年の刊行当初、文壇がその同性愛モチーフの異質性に無関心だったのに対し、一方で、一般読者のなかには好奇心を抱くものも少なくなかったという相反する反応の共存を指摘し、その背景として、終戦後まもない当時の日本社会における同性愛言説自体の稀少さや二種の同性愛イメージの混在、あるいは、同性愛を周縁化する異性愛イデオロギーの浸潤といった問題があったことを考察した。さらに、同性愛言説の黎明期に突入した51年、『禁色』の同性愛モチーフが社会的に強烈なインパクトを放つと、文壇、および同性愛当事者・論者を含む一般読者はともに、その原点を『仮面の告白』に求めはじめ、やがて本作は〈三島文学の源泉〉を意味する同性愛小説として

カノン化されてゆく。以上のような流れをたどることによって、現在にいたるまで保持されている、近代日本初の本格的な同性愛小説という『仮面の告白』の文学表象が、実際は50年代の『禁色』の文学表象から遡及的に再生産されたものであることを最終的に明らかにした。

今後は、そうした文学表象が50年代以降、ゲイネスを惹き起させる三島の身体パフォーマンス／言説を経て、どう新たに再生産されていったかを考えるとともに、一方で、本稿で論じた49年前後の日本の性規範や異性愛／同性愛言説の時代状況をもふまえて、そうした時点から、戦前・戦後の同性愛遍歴の記憶として再編される本作の「私」の告白について考察を進めていこうと考える。

注

1. 起筆は1948年11月25日(1948年11月2日付坂本一亀宛書簡、全集38巻507頁)、擲筆は1949年4月27日(「あとがき」、『三島由紀夫作品集1』、新潮社、1953年7月、全集28巻98頁)。
2. 三島由紀夫「私の遍歴時代」(『東京新聞』夕刊、1963年1月10日～5月23日)全集32巻282・294-302頁
3. 以下、本稿で使用する「同性愛」は、すべて男性の同性愛をさす。
4. 田中美代子「改題」(全集1巻676頁)、および同書677頁収録の原稿写真。『仮面の告白』初版に付された自作解説(「『仮面の告白』ノート」、『仮面の告白』月報、河出書房、1949年7月)以外に、三島は「最長九枚、最短一枚の、十八種類にわたる序文」を用意していたらしいが(注2前掲エッセイ、全集32巻303頁)、この序文はうち唯一発見・公表されたもの。
5. 式場隆三郎宛書簡(1949年7月19日付)全集38巻513頁
6. 井上隆史「新資料から推理する自決に至る精神の軌跡—今、三島を問い直す意味—『仮面の告白』再読」(『続・三島由紀夫が死んだ日』中条編、実業之日本社、2005年)→『三島由紀夫 虚無の光と闇』(試論社、2006年)2006年:35-39頁は、もともと同性にもある程度関心のあった三島が、本作執筆において「同性愛について意識的に学習し、それに従って旧作を再構成」する過程において、自己のセクシュアル・アイデンティティを「同性愛者と意識的に規定」していったことを考察している。本作の同性愛モチーフが、小説戦略の一つでありながら、なおかつ私小説的な要素でもある、という両義性にはそうした井上の考察にあるような背景が考えられる。
7. 井上(注6前掲論文)2006年:21頁、佐藤秀明「仮面の告白(三島由紀夫)一動くセクシュアリティ」(『ジェンダーで読む 愛・性・家族』岩淵・長谷川編、東京堂出版、2006年)46-47頁、久保田裕子「『仮面の告白』—セクシュアリティ言説とその逸脱—」(『三島由紀夫研究』③、2006年12月)61頁。
8. 花田清輝「聖セバスチアンの顔—『仮面の告白』評—」(『文芸』1950年1月)→『批評と研究 三島由紀夫』白川編、芳賀書店、1974年)
9. 「読売新聞」(1949年12月26日付)の「一九四九年読売ベスト・スリー」では、九人の選者のうち六人(青野季吉、伊藤整、川端康成、丹羽文雄、平野謙、福田恆存)から推挙された。
10. 上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』(筑摩書房、1992年→ちくま文庫、2004年)2004年:354頁
11. 荒正人「異常心理ではない」(『図書新聞』1949年7月23日)
12. 無署名「若きエロスの告白 相剋する素顔。と仮面。」(注11前掲新聞)
13. 神西清「仮面と告白と—三島由紀夫氏の近作」(『人間』1949年10月)70頁
14. 北原武夫・中野好夫・林房雄「創作合評」(『群像』1949年11月)111-112頁
15. 花田(注8前掲評論)1974年:33-35頁
16. 1950年までの書評として、ほかに瀬沼茂樹「油のつた四人の作家」(『日本読書新聞』1949年11月30日)は、「凡庸でない才能がひらめいている」とし、福田恆存「解説」(『仮面の告白』新潮文庫、1950年)は「のちに残る最上の収穫」と賞讃している。同性愛モチーフとくに関心を示さず、次世代作家の登場に期待をかける論旨は、ほかの同時代評とほぼ同様であるといっている。
17. 柿沼瑛子・西野浩司・伏見憲明「座談会 三島由紀夫からゲイ文学へ」(『クィア・ジャパン』vol.2、2000年4月)166頁
18. 古川誠「セクシュアリティの変容—近代日本の同性愛をめぐる3つのコード—」(『日米女性ジャーナル』No.17、1994年)30-31・47-50頁など
19. 三島由紀夫「あとがき」(注1前掲書)全集28巻98頁
20. 伏見憲明「ゲイの考古学」(『ゲイという経験』増補版、ポット出版、2004年)355頁
21. 跡上史郎「最初の同性愛文学—『仮面の告白』における近代の刻印—」(『東北大文学芸研究』2000年9月)70頁
22. 荒(注11前掲評論)、神西(注13前掲評論)70頁、瀬沼(注16前掲評論)、花田(注8前掲評論)1974年:32頁。三島による刊行前の広告文「作者の言葉(『仮面の告白』)」(『近代文学』1949年4月)全集27巻176-177頁および初版本の帯において、戦後版「キタ・セクスアリス」であることが自己表明されているためか。
23. 伏見「ゲイ年表」(注20前掲書)366-367頁
24. 古川(注18前掲論文)30頁。また、赤川学「セクシュアリティの歴史社会学」(勁草書房、1999年)300頁も「性について語る言説世界の容量そのものが、三〇年代後半以降、特に国家総動員体制が本格化する四〇年代には小さくなる」としている。
25. 平塚良直『日本における男色の研究』(人間の科学社、1994年)2頁、伏見(注20前掲書)272-274頁。当時を振り返った江戸川乱歩「探偵小説三十五年 夜の男の生態」(『宝石』1958年8月号、『江戸川乱歩全集 第29巻 探偵小説四十年(下)』光文社、2006年)2006年:363-370頁は、この事件が世間の注目を集めたために、乱歩と上野の男娼たちとの座談会「夜の男の生態」が人気雑誌「旬刊ニュース」(1949年2月10日号)に掲載されたことを伝えている。
26. 本稿で使用する「ゲイバー」とは、「男」ジェンダーを欲望する男たちに出会いの場を提供する飲食店(伏見、注20前掲論文、301頁)をさす。
27. 伏見(注20前掲論文)301頁。また同書313頁によれば、詳細はさだかでないが1948年ごろ新宿にも同種の店「夜曲」が開店していたようだ。
28. 伏見(注20前掲論文)332頁によれば、1946年からの「猟奇」「りべらる」などのカストリ雑誌にも時折同性愛が猟奇的に取り上げられていたようだ。
29. 式場宛書簡(注5前掲書簡)全集38巻513-514頁
30. 坂本宛書簡(注1前掲書簡)全集38巻507頁
31. 村松剛「三島由紀夫の世界」(新潮社、1990年→新潮文庫、1996年)1996年:161頁。猪瀬直樹『ペルソナ 三島由紀夫伝』(文芸春秋、1995年→文春文庫、1999年)1999年:263-264・267-268頁、井上隆史「全集改題補訂」(全集補巻)688頁。
32. 望月衛「性的成熟と社会的成熟—三島由紀夫「仮面の告白」を検討しつゝ」(『思索』1949年11月)
33. 望月衛「性の生活」(理想社、1949年)159-162頁によれば、「仮性同性性愛」とは、女性ジェンダーをもった男によるホモセクシュアリティをさす「真性同性性愛」に対して、男性ジェンダーをもった男によるホモセクシュアリティをさしている。
34. 『仮面の告白』刊行以前の三島がまだ望月と接触していなかった可能性もあるが、村松や猪瀬の取材などを考え合わせると、その可能性は極めて薄い。また猪瀬は、本作に描かれる同性愛指向の造型が望月衛「性と生活」の「仮性同性性愛」モデルに拠っていることを指摘している(猪瀬、注31前掲書、1991年:266-267頁)。前掲の望月論文には、三島との直接的関係を隠蔽する身ぶりとともに、語り手「私」と作者とを切り離して論じようとする細やかな配慮がみられるが(望月、注32前掲論文、54-55頁)、それは心理学者と相談者としての二人の仲を示すものとも解せる。
35. 望月が当時同性愛に関して、日本のパイオニア的なオピニオンリーダーになりつつあったことは、「社会現象としての同性愛」(『婦人公論』1950年3月号)114頁という女性向けの雑誌記事があることから明らかであろう。この記事はまた、50年代、一般女性たちも同性愛に関心をもち始めていたことを示すだろう。
36. 望月(注33前掲書)160頁
37. 猪瀬(注31前掲書)1999年:261頁
38. 石川弘義「欲望の戦後史」(講談社、1966年)21-24頁、山本明「カストリ雑誌研究」(出版ニュース社、1976年→中公文庫、1998年)、「特集・敗戦直後」(『別冊週刊読売』1973年8月18日)、南博「社会心理研究所『続・昭和文庫 1945-1989』(勁草書房、1990年)59-61頁など。
39. 赤川(注24前掲書)303頁。また、巻正平「ヴァン・デ・ヴェルデ「完全なる結婚」 革命の友から古典の座まで」(『朝日ジャーナル』1965年10月)43頁も、「戦後日本の性の解放に、もっとも大きな影響を与え、戦後日本の性知識普及の方向を定めた」と位置づけている。
40. 辻村明「戦後日本の大衆心理 新聞・世論・ベストセラー」(東京大学出版会、1981年) i 頁、木本至「婦人雑誌にあるセックス指導書の変遷」(『えろちか』1972年8月)107-122頁、井上ひさし「ベストセラーの戦後史2 完全なる結婚二十一年」(『文芸春秋』1987年3月)409頁。
41. 井上(注40前掲論文)409頁
42. 巻(注39前掲論文)45頁
43. ちなみに島崎博・三島瑠子編『定本三島由紀夫書誌』(薔薇十字社、1972年)324頁によれば、三島の蔵書には、戦前発禁処分になった抄訳「完全なる夫婦」(滑川鋭雄・平野馨訳(平野書房、1930年)、戦後の完訳「完全なる結婚」(柴豪雄・酒井敬一訳(大洋社、1946年)の二冊がみられる。

44. 『完全なる結婚』安田一郎訳(河出文庫、1982年)16-24頁
45. 上野千鶴子「解説(三)」『日本近代思想体系23 風俗 性』小木・熊倉・上野編、岩波書店、1990年)532頁。ただし赤川(注24前掲書)197頁が指摘するように、この三位一体は「夫婦和合の鍵はセックスにある」という「セックスにおける夫婦和合」の言説と、「セックスは夫婦に限定する」という「貞操・純潔・一夫一婦」の言説との、「二つの言説要素の合成」であり、本稿では前者の意味で「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」という語を用いている。
46. 新戸籍法では、「家や戸主中心に親族が網羅される従来の戸籍を改め、結婚すると新しい戸籍が編製され」た(浅野富美枝「現代」、『家族と結婚の歴史[新装版]』、森話社、2000年、195頁)。
47. 『完全なる結婚』は70年代まで再版や続編出版がくり返したが、それは本書の唱道したロマンチック・ラブ・イデオロギーが、戦後資本主義経済の発達によって生まれた「男は外で働き、女は家で家事育児」といった近代的な性別役割分業イデオロギーと、家庭を愛することが会社を愛し、国を愛することにつながるといったマイホーム主義イデオロギー(浅野、注46前掲論文、181頁)を支柱とする戦後日本の家族像にも適っていたからだと考えられる。
48. 南博・社会心理研究所(注38前掲書)64頁
49. 福島鑄郎『雑誌で見る戦後史』(大月書店、1987年)90-93頁
50. 以下、「キンゼイ報告」については赤川(注24前掲書)303-307頁を参考にした。
51. 赤川(注24前掲書)307頁
52. 赤川(注24前掲書)307頁
53. 野間宏「三島由紀夫の耽美」(『文学界』1951年2月)130頁
54. 白井吉見・中村光夫対談「三島由紀夫」(『文学界』1952年11月)162-163頁
55. 白井・中村(注54前掲対談)164・167-168頁。
56. 神西清「ナルシシズムの運命」(『文学界』1952年3月→注8前掲書)1974年:16-18・19-21頁
57. 福島(注49前掲書)95頁
58. 伏見(注20前掲論文)332-333頁
59. 山中剛史「解題「アドニス」総目次(第一回)」(『薔薇窗』2005年9月)32-33頁
60. 管見の限りでは望月衛「社会現象としての同性愛」(『婦人公論』1950年3月)114頁がある。
61. 伊藤文学『薔薇よ永遠に 薔薇族編集長35年の闘い』(九天社、2006年)4頁
62. 三島由紀夫『禁色』(全集3巻)76-82頁。また、「禁色」創作ノート(全集3巻)588頁の構想メモに「日比谷公園」の記載がある。
63. 三島由紀夫『禁色』(全集3巻)118-124頁。また、「禁色」創作ノート(全集3巻)589頁にそれとわかる構想メモがある。588・595頁にも「ブラスウィック」の記載がある。
64. 伏見(注20前掲論文)359頁
65. 山中(注59前掲論文)33頁によれば、「ADONIS」創刊の三ヶ月後にはアドニス会の会員登録は八百名以上に達していたとされる。
66. 伏見(注20前掲論文)269・283・297・314-316頁
67. 『ゲイの民俗学』礫川全次編(批評社、2006年)161・141頁。ただし両誌は同性愛専門誌というわけではない。
68. 現在、「風俗草紙」・「風俗科学」は実際に手にすることが困難なため、本稿で取り上げる両誌の記事は、すべて礫川編(注67前掲書)に拠った。
69. 礫川全次(注67前掲書、153頁)が指摘するように、とくに当時の画期的な論調としては、扇屋亞夫「男色者とその性的性質」(『風俗科学』1巻2号、1953年10月→注67前掲書)2006年:162頁の「むしろ堂々「選ばれた人」ぐらいの誇りをもつといい」という呼びかけが挙げられる。
70. 千明克巳(衆道秘伝考)(『風俗草紙』1巻6号、1953年3月→注67前掲書)2006年:164頁
71. 鹿火屋一彦「そどみあゝの断層—男色を不可解とする人のために—」(『風俗草紙』1巻8号、1953年11月→注67前掲書)2006年:174頁
72. 柏倉幸蔵「男色は流行する」(『風俗科学』1巻1号、1953年8月→注67前掲書)2006年:151頁
73. 福井県のQ・Q生の投稿「そどみあ通信」(『風俗草紙』1巻8号、1953年11月→注67前掲書)2006年:195頁
74. 千葉県のカ・M生の投稿「そどみあ通信」(注73前掲雑誌→注67前掲)2006年:185頁
75. 峰あやを「アドニス」総目次(第一回)(注59前掲雑誌)44頁によれば、「ADONIS」3号には田中純夫「小説『禁色』の周辺」という記事の掲載がある。
76. 比企雄三・扇屋亞夫「対談 そどみあゝの焦点を廻つて 同性愛と男根羨望」(『風俗科学』2巻2号、1954年2月→注67前掲書)2006年:228頁-229頁。伊藤(注61前掲書)2頁によれば、この対談の時期にも「週刊タイムス」(1954年2月24日)によって「流行する同性愛旋風」という特集が組まれている。
77. 「『仮面の告白』論」(『近代文学』1954年1月)69-71頁
78. 佐藤(注7前掲論文)43頁が、「家族構成や経歴のほか、新たに見つかった年譜的事実とも齟齬をきたさない、ほぼ三島の半生をなぞったかのような」、「作者その人を主人公にしたと思わせる小説」と要約するように、その性質上、本作は長く(私小説)とみなされてきた。当時の三島の言説には揺らぎがあるものの、1948年11月の坂本宛書簡(注1前掲書簡)全集38巻507頁に「自分自身の生体解剖」を試みた「生れてはじめての私小説」とあり、また、刊行前の広告文(注22前掲広告)全集27巻177頁にも「能ふかぎり正確さを期した性的自伝」と自作解説があることも一因となっていよう。フィクションの境界については井上(注6前掲論文)2006年:21-33頁などが参考になる。

※三島由紀夫のテキストの引用はすべて『決定版三島由紀夫全集』全42巻(新潮社、2000-2005年)に拠り、巻数を記載する際は「全集」と表記した。
※引用に際し、漢字は適宜現行の字体に統一し、ルビは一部省略した。
※本文体裁の都合上、一部記号を変更した。
※雑誌論文に関する記載は、必要と思われるもののみ巻号も付した。